

氏名	高石 憲明
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 8897 号
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	秩序付ける知恵—トマス・アキナスの知恵概念研究—

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	桑原 直巳
副査	筑波大学 教授	文学博士	伊藤 益
副査	筑波大学 教授	文学博士	保呂 篤彦
副査	西南学院大学 教授	文学博士	片山 寛

#### 論文の要旨

本論文は、十三世紀ヨーロッパの代表的キリスト教神学者であるトマス・アキナスの知恵(*sapientia*)概念についての研究である。トマス思想において極めて重要な概念である知恵は、賜物としての知恵、知的徳としての知恵、聖書に基づく神学、形而上学、そして神の知恵という形で多様な形で語られ、従来の研究はそのそれぞれの場面での「知恵」についての個別的な研究があるのみであり、トマスの知恵概念を包括的に扱った研究は見出さなかった。本論文は、これらの知恵の差異に注目すると共に、知恵それ自体に属する共通の性格を「秩序付けるものである」ということに求め、トマスの知恵概念それ自体の包括的理解を試みている。

本論は大きく三章から構成される。第一章「知性と知恵」では、トマスの思想における様々な「知恵」を大まかに区別している。まず、最も大きな区別として神の知恵と人間の知恵とを区別している。神の知恵は完全な知恵としてあらゆる知恵にとって典型的な役割を果たすが、その知恵は宇宙に神自身を目的とする秩序を与え、宇宙に正義を実現する。次に、人間の持ち得る知恵の区別について、まず神愛(*caritas*)によって働く共本性性(*connaturalitas*)によって判断する神から与えられる賜物としての知恵と、理性の完全な使用によって判断する研鑽によって獲得される知的徳としての知恵とを区別する。これらはいずれも神的理拠に基づく判断に関する人間知性の完成に関わるものとして比較される。次に、信仰を前提とし信仰箇条を原理とする学知である聖書に基づく神学と、哲学的神学、すなわち形而上学とを対比している。聖書に基づく神学と形而上学とは、いずれも神的学(*scientia divina*)としての知恵として比較される。

これらの区別や関係について概観した上で、著者はこれらの区別以前に一般に知恵に当てはまる性格を「宇宙全体の目的である真理へと秩序付ける」ことに求めている。この共通の性格が様々な知恵において様々な在り方で見出されるが、それらを比較する際に基準となる観点は、一つには、知恵による秩序付けが及ぶ範囲であり、もう一つには、知恵が秩序付けられるもののいかなる関係や対比を認識するかということである。

第二章「知恵の働き」では、これらの知恵の区別についてより詳述している。最初に、学知として遂行され

る知恵、すなわち聖書に基づく神学と形而上学の秩序付けの相違について論じている。形而上学を頂点とする諸学知の秩序が論証的必然性によって成り立つ秩序であるのに対して、聖書に基づく神学の下では目的の必然による秩序が見出され、そこでは意志の働きが中心的な役割を果たす。次に、賜物としての知恵が知的徳としての知恵と異なり思弁的のみならず実践的でもあるという特徴が、神愛の働きに由来し、この知恵において、目的への秩序付けに関して人間の行為の規整に関わるという知恵の特性が明示されていることを示している。

第三章「知恵の目的」では、目的へと秩序付けるという知恵の主要な性格に注目して、知恵が「秩序付ける」ということの意味を解明している。最初に、主要的に愛を伴う知恵である賜物としての知恵が人間の生を神という超自然的目的へと秩序付ける在り方について解明を試みている。かかる超自然的目的への秩序付けとして、まず観想的生が取り上げられる。観想的生は神への愛を動因とするとともに、神への完全な愛へと秩序付けられている。この生はまた実践的生を指導するものである。この愛と共にあり実践を指導するものである観想的生の幸福は知恵に属する。また、他者を教え導くことがそれに属するところの無償の恩恵(*gratia gratis data*)についての論述において、知恵における愛の重要性と、トマスが知恵を「秩序付ける」という点において評価していることを示している。更に、知恵が神へと秩序付けるところから、賜物としての知恵と敬神(*religio*)との関係に注目している。敬神は神へとしかるべきものを帰する神への正義であり、畏れの賜物を根源とするが、神への畏れは賜物としての知恵の最初の果である。それゆえ、敬神に属する行為である神への礼拝は知恵のしるしと言われる。ここに、筆者は賜物としての知恵と正義との関係を見出している。

このように神愛を伴う賜物としての知恵が人間の実践に関わるのに対して、「単に思弁的な知恵」として賜物としての知恵から区別される知的徳としての知恵が実践へと関わる可能性について考察するために、著者はまず人間の実践的領域の成立場面を検討している。その際、「理性が自由の原因である」というトマスの言葉を手がかりに、人間は実践的事柄について「目的の完全な認識」を持つことによって自由であることを示している。他方、自由には「本来の目的へと結びつく」という意味も含まれている。自由に属するこれら二つの要素の検討を通じて、著者は知的徳としての知恵がいかなる点で実践的であり得ないか、また逆にいかなる点でそうあり得るかの解明を試みている。本論は、「本来の目的へと結びつく」という点において知恵が実践に関与し得る可能性に注目する。すなわち、知的徳としての知恵は人間の実践を「在るもの」として理解し新しい観点から意味付けることによって本来の目的へと秩序付ける。知的徳としての知恵の具体的な遂行として、著者は形而上学の秩序付けについて論じている。特に、第一の作動因としての神があるということの論証と、世界に端緒があることの論証不可能性との関係について論じることによって、形而上学が、万物がその存在において有する神への「依存性」に基づいてすべてのものを秩序付けるものであることを示している。

形而上学による神認識の基礎として、万物の存在における神への依存性を確保した上で、次に、著者は形而上学における神についての判断の形成について論じている。そこでは、形而上学において「単に判断における合致」が遂行されていること、またそれによって完全性を表示する名称を本質的な仕方神に帰することが可能になり、そこに形而上学的言語の或る種の超越が見出されることを指摘している。神に関わるそれらの判断において、すべてが神に依存するということが理解が深められているが、とりわけ「神」という名称において、トマスはこの依存性に基づく形而上学の秩序付けが万物の目的としての神への秩序付けであることを明示しているとされる。この点において、形而上学の秩序付けの内に、一般に知恵に当てはまる性格である「宇宙全体の目的である真理へと秩序付ける」という在り方が見出される。以上で明らかになったことを受けて著者は、真理、善、目的としての神と知恵の秩序付けとの関係について論じている。その際、まず真理と善の秩序について一般的に論じている。それによって、万物がそれに依存するところの神の知恵との合致によって事物の真が成立すること、それは同時にすべてのものにとっての完全性であること、更に、善の秩序が第一であることが明らかになる。これらの議論から著者は、知恵が「宇宙全体の目的である真理へと秩序付ける」ということ

の意味は、神の知恵、神の正義の働きに参与することにあるとの理解を示している。さらに、知的徳としての知恵もまた、万物の存在における神への依存性と形而上学的言語の超越によってすべてを神へと秩序付け、そのようにして神に「しかるべきもの」を帰する限りにおいて、その働きに参与することを明らかにしている。

## 審査の要旨

### 1 批評

知恵は、トマス・アクィナスにおいて最も重要な概念の一つであるにもかかわらず、これまでその概念内容を詳細かつ包括的に分類し分析した著作はなかった点で、本論文はひとつの新しい試みである。論文の意図は明確であり、記述も基本的な文献をよくおさえて展開している。その綿密な分析と論理的な展開とは高く評価するに値する。また、知恵の最も基本的な働きは「目的への秩序づけ」だとする著者の主張は説得的である。知恵とは真理を知ることであるが、その真理とは神的知恵が事物に与えた「秩序」だと言いうるであろう。この秩序を発見し、それを「知る」こと、すなわちそれに同一化してゆくことが人間的知恵と解することにより、トマス思想の現代的意義が開けて来る可能性が感じられる。また、トマス自身における事物や概念の区別を、トマスの考え方に即しつつ著者自身の思索にもとづいてさらに発展させ、補完している点も評価に値する。

ただし本研究には課題も残っている。トマスの知恵概念を「秩序づけ」を軸として解明するとしても、知恵概念の広範な広がりの中での「秩序づけ」相互の関係が問題となる。たとえば、厳密な意味で「秩序づけ」をするのは神的知性のみであるのか、もしそうならば人間知性にも「秩序づけ」に対する何らかの能動的なちからが残されているのか、という問題が挙げられる。著者の結論は「人間の知恵は何らかの仕方で、宇宙に神的正義を実現する神の知恵の秩序付けに参与する」(95頁)という言葉によって示されている「受動的能動」という考え方にあるように思われる。この「参与」という受動的能動をどのように受け取るべきかが今後解明すべきさらなる課題となろう。また、多様な知恵概念が語られる場面での「秩序づけの目的」の多様性をいかにして整理してゆくかという点でも課題が残る。

しかしながら、これらの課題は、トマスにおける知恵概念の包括的な意味について、可能な限りにおいて明瞭に探求を試みた本論文のすぐれた学的成果としての価値を損なうものではない。ゆえに、本論文は博士学位請求論文として十分な学術価値を有するものと認めることができる。

### 2 最終試験

平成31年2月14日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。